

## 厚い記憶—市大での3年半—

私は1985年4月に市大の修士課程に入学し、3年半後の1988年9月末には博士課程を中退している。この3年半という在学期間は、立命館大学（4年）→大阪市立大学（3年半）→東京都立大学（7年半）→和歌山大学（4年目）という私の大学遍歴の中でも最短に属する。ある組織に属した測定可能な物理的期間を、その組織との親和性の物差しにするとといった実証主義的方法論に依拠すれば、私と市大との縁は薄かったともいえよう。しかし、私の実感している（現実）は正反対である。この短い市大在学期間こそが、研究者としての私のあり方を基本的に規定する（厚い）期間だったと今にして思う。あれほど圧縮された濃密な期間は、私の大学生活の後にも先にもなかった。

立命館大学の学生だった1984年の4月頃、私はある意味で唐突に大学院進学を決意した。他人様に語れるような立派な進学理由があるわけではなかったが、卒論で村落研究に取り組み、かつ当時の人文地理学界に新風を吹き込んでいた〈人文主義地理学〉に心を奪われていた私は、山野正彦先生のおられる市大を志望した。当時世間を賑わせていた〈ニューアカデミズム〉にもミーハー的に染まっていた一私大生にとって、理論志向の（と私には思えた）市大地理学教室は遙かに仰ぎみる高峰という感じだった。大学間のポスターレス化が今ほど進んでいず、修士課程の定員も多くなかった当時、出身校以外の大学院を受験することは今以上に大きな試験だった。理論に通じた先生がもし立命におられたならば、私は間違いない立命の大学院を受験していた。ともあれ、当時必須だった第二外国語（ドイツ語）を必死で勉強したことが功を奏したのか、私は憧れの市大大学院にどうにか合格することができた。

私が市大に入った時点で、地理学教室におられたスタッフは春日茂男先生、服部昌之先生、中村泰三先生、平野昌繁先生、山野正彦先生、石川義孝先生の6名だった。14年後の今、教室に残っておられるのが平野先生と山野先生だけであることを思うと、まさに隔世の感がある。当時、春日先生は一年後に定年を控えておられたが、石川先生は同年に奈良大学から移ってこられたばかりの若々しい先生だった（今でもその若々しさは変わらないが）。当時の院生は、修士課程の一年上に豊田昌秀さん、博士課程に野尻亘さん、年代雅夫さん、大場茂明さん、張志偉さん、研究生として上原秀明さん、田畑久夫さんがおられただけで、きわめて小人数だった。翌年には、大場さんが教室の助手になられ、上原さんが熊本短期大学に就職されたので、院生はさらに減ってしまった。在学中に院の後輩となったのは、私がM3になった1987年4月に学部から進学した岡森哲也君だけである。

市大での一年目は、立命との雰囲気の違いに戸惑いながら過ごす毎日だった。最もショックだったのは、入学早々、密かに博士課程受験を意識していた私に、院の先輩方から浴びせられた「市大では2年でドクターに進学した人はいない」という言葉だった。最初から留年を覚悟せねばならないのかと、私はひどく憂鬱になった。また春日先生のゼミでは、語学に堪能な先輩方が次々と吹米の方法論



的文献を紹介され、春日先生がその内容に烈しいコメントを加えられるのを目の当たりにして、立命在学中に外国語文献をほとんど自発的に読んだことがなかった私は、毎回大きなプレッシャーを感じつつ端っこのほうに座っているしかなかった。しかし、この春日ゼミに出ることができたのは、今から思えばきわめて幸運だったというしかない。

M2になって、地理学教室は旧い文学部棟の1Fから4Fに移転し、その頃には市大の雰囲気にも少しは溶け込めるようになった。そして、市大伝統の？（修論3年計画）にもすっかりなじんでしまった私にカミナリを落とした唯一の先生が、他ならぬ石川先生だった。私はその時半泣きになりながら、安全パイ的な修論ではなく理論的フレームワークに裏付けられた（冒険的）な修論を書きたいということを生意気にも訴えたところ、先生は3年計画を認めてくださった。あの石川先生の寛大さがなければ、不器用で筆が遅い私は修論で潰れていたかもしれない。

服部先生のゼミは、おだやかな先生のお人柄がよくにじみてた授業だった。中村先生の授業も、当時のソ連の経済地誌や都市地理を中心とした肩のこらない内容だった。平野先生からは、空中写真の立体視が苦手で判読もろくにできないことに呆れられながらも、多くのことを教わった。実は、ワープロの操作を初めて教わったのも平野先生からである。そして、助手になったばかりの大場さんには、公私ともどもほんとうにお世話になった。当時の市大地理学教室には、大場さんや岡森君、そして新見和也君らを中心として、一種独特の「大場ワールド」とでもいうべき世界ができあがっていた。これはきわめて居心地のいい世界だったし、大場さん、豊田さん、岡森君、丹羽弘一君らとEugen Wirthの『Theoretische Geographie』を輪読したのも懐かしい思い出である。

山野先生は、私がM2の時から院の授業を持たれるようになったが、その最初の授業で話されたのは、かつて先生が『人文研究』に書かれた、社会形態学と人文地理学の交流・葛藤を軸とした世紀転換期の地理学史だった。この講義は、人文主義地理学とは別の意味で私の心を捕えた。当時の私は、山野先生の諸論文に心酔しきっていたし、初めて受けた先生の講義の一言一句が私の心に沁み込んできた。そして私は「デュルケム社会形態学の再検討」という20枚ほどの拙い課題レポートを、その後ドイツに在外研究に出かけられた先生のもとに送った。デュルケミアンとしての私の原点は、まさにこの講義とレポートにある。私のデュルケムへの過剰なまでの執着は、山野先生のご理解を超えるものかもしれないし、それがもて私は結局人文主義地理学から距離を置くことになってしまったのだが、いずれにせよ山野先生から受けた学恩は強調しすぎてもしすぎることはない。

修論に真剣に取り組み始めたのは、M2の夏休み頃というきわめて遅い時期だった。これには、卒論の『人文地理』への投稿に手間取っていたという事情もあった。しかし、人文主義地理学の立場から村落研究をやりたいという気持ちばかりが先走って、修論の構想はなかなか進展しなかった。M2の確か11月頃に行われた修論指導では、理論的フレームワークについて発表しただけで、その時点でもフィールドはまだ決まっていなかったように思う。フィールドを具体的に奈良市狭川地区と決めたのは、その年の12月頃ではなかったか。白状すれば、べつにこれといった調査地決定理由があったわけではない。M2のその頃までは、理論的フレームワークを固めるのに四苦八苦して、とてもフィールドワークができる状況ではなかった。しかも、理論的フレームワークが固まったからフィールドワークをようやく始めることができたというわけでもない。いくら3年計画とはいえ、フィールドワークをメインとした修論を書くのに、M2の晩秋の時点でまだフィールドさえ決まってい

うのはヤバすぎると感じ、理論的フレームワークも固まらないままに、やむなくフィールドをでっち上げたというのが真相である。しかもその決め方たるや、切羽詰まって近畿地方の2万5千分の1地形図を手当たり次第にみて、たまたま面白そうな地名(垣内地名)と面白そうな集落形態(一村多集落型)をもった村落をみつけたというだけにすぎない。フィールドは、どこでも良かった。当時の私にとっては、人文主義的研究をすることこそが大事だった。

初めて一週間ばかりのフィールドワークを行ったのは、M3になる前の3月である。とにかく(人文主義的)と認めてもらえる内容にするため、当時山野先生が『生と死の人類学』に書かれた(恐怖の場所)論を手がかりに、化け物が出るとされた場所や儀礼の場所、神社、寺、墓地などを手当たり次第に聞き取って、大縮尺の地図に落としとしていった。同様の調査は、7月下旬と10月上旬にもやはり一週間ほどの期間で行った。

修論執筆は、ほんとうに苦しかった。ほぼ一年半の間読みふけた歌米の理論的・方法的文献と、一年足らずのフィールドワークで集めた雑多な資料を、いったいどのように接合すればいいのか。理論的フレームワークを固めるという隘路を選んではしまった私か、ようやく修論を書き出し始めたのは、1987年の12月近くになってからという、とてつもなく遅い時期だった。締切りは翌年の確か1月10日前後ではなかったか。しかしワープロを自宅に持たず、またそれほど使いこなす自信もなかった当時の私は、ひたすら手書きで修論を書くしかなかった。あれほど悩みに悩みぬいて文章を書いた経験は、後にも先にもない。それでも書いてゆくうちに、社会集団の認識を経た村落の静態的な空間構造を描き出すという方向がようやく定まってきた。今から思えば相当強引な方向づけだったが、当時はそれで精一杯だった。私はがむしゃらに、クリスマスも正月もなく執筆と図表作成を続け、締め切り間際によりやく修論はできあがった。研究者になってから、私はあのような苦闘のなかで論文を書いてきたのだろうか。そう思うと、この10年余りの自らの研究態度のあり方がきびしく反省されてくるのである。

修論提出後、私は同年(1988年)4月に博士課程に進学したが、その年の10月、思いかけず都立大の助手に採用されることになり、市大での厚い濃密な研究生生活はあっけなく終了した。しかし、市大の先生方との縁がそれで切れたわけではない。特に、亡くなられた服部先生には、講師以上の教員公募があるたびに推薦状を書いていただき、感謝の言葉もない。先生のご冥福を心よりお祈りしたいと思う。

市大地理の理論志向の伝統は、もとより本質的なものではない。それは、様々なアクターによって表象され、語られ、でっち上げられたものに他ならない。しかし、このでっち上げられた伝統は、伝統の新しい創造者たちを市大に呼び込む役割を果たしている。市大地理のクリティカルな伝統が、不断に再創造されてゆくことを願ってやまない。

(昭和63年修了)